

公卿の日記に見られる語彙の一特徴

——平安中期の日記を中心に——

清水教子

はじめに

平安中期の我が国には、文章様式として漢文（漢文訓読語文）・変体漢文・和文の三つが存在していた。それを表記の面から見ると、漢文・変体漢文は漢字（男手をとこで）^(注1) 専用で（尤も、変体漢文には平仮名などが交じることがある）あり、和文は平仮名（女手をんなで）^(注1) が中心である。紫式部の生きた時代を中心に眺めてみると、漢字文献としては変体漢文としての公卿の日記、仮名文献としては中流貴族（受領）階級の女性の書いた日記・物語がある。例えば、前者には藤原実輔（957-1046）の『小右記』（978-1072）^(注2)、藤原道長（966-1027）の『御堂関白記』（998-1021）^(注3)、藤原行成（972-1027）の『権記』（991-1011）^(注4) などがある。後者には、藤原道綱の母（936?-995）の『蜻蛉日記』（974年までに成立）^(注5)、和泉式部（生没年未詳）の『和泉式部日記』（1008年頃成立か）^(注6)、紫式部（970-978-?）の『紫式部日記』（1010年頃までに成立）^(注7) などがある。又、上記の日記よりは時代が少し下って菅原孝標の女（むすめ）（1008-?）の『更科日記』（1060年頃成立）^(注8) もある。物語としては、『源氏物語』（1010年頃成立）^(注9) や『栄花物語』（1028年-1037頃成立か）^(注10) などがある。

ここでは、変体漢文としての公卿の日記と和文としての女性の日記や物語とを比較検討して、語彙・（文体）の領域での共通点や相違点を明らかにし、位相語の面から位置付けてみる。

その方法として、公卿の日記と共通する内容を持つ女性の日記や物語とを比較する。

なお、漢文^(注11) や一部の変体漢文^(注12) には訓点資料^(注13) が存在しているが、公卿の日記にはそれが見当たらない。そこで、当時の日本人が国語辞典として書記言語生活に利用した『色葉字類抄』^(注14) や上記の訓点資料^(注13) の読みなどを参考にして、読み下し文を作成する。その読み下し文と和文とを比較検討するという手続きをとる。

一 公卿の日記と女性の日記や物語とに共通する内容

ここでは、人の生死に関する記事で公卿の日記と女性の日記や物語とに共通するものにどんなものがあるのかについて述べていく。

生に関する記事では、一条天皇と藤原道長の長女一彰子中宮一との間に生まれた敦成（あつひら）親王の誕生前後に関わるものがある。敦成は一条天皇の第二皇子で、後に後一条天皇となった人である。寛弘五年（1008）九月十一日に生まれ、八代天皇としての在位は1016年から1036年までの21年間である。長元九年（1036）四月十七日、29歳で崩じた。公卿の日記では、『小右記』（二p.146）・『御堂関白記』（上p.268）・『権記』（二

p.102) に、女性の日記では『紫 式部日記』(p.171-p.174) にそれぞれ記述がある。

死に関する記事では次の二つがある。帥宮為尊(ためたか)親王の場合と藤原行成の娘の場合とである。

為尊親王は冷泉天皇(950-1011)の第三皇子で、母は関白藤原兼家(道長の父)の娘超子である。貞元二年(977)に生まれ、長保四年(1002)六月十三日に26歳で薨じている。なお、この為尊親王の弟は、『和泉式部日記』の女主人公「女(をんな)」の恋の相手としてよく知られている帥宮敦道親王(冷泉天皇の第四皇子)であり、寛弘四年(1007)十月二日に26歳で薨じている。公卿の日記では『権記』(一p.262上)に見られるが、『小右記』や『御堂関白記』には欠けている。女性の日記では、『和泉式部日記』(p.85)の中に為尊親王の亡くなったことを伺わせる記述が見られる。

藤原行成の女(むすめ)は、藤原道長の六男長家(1005-1064)の妻の一人であり、親譲りの能書家であつたらしい。寛弘四年(1007)に生まれ、治安元年(1021)三月十九日に15歳で病没している。公卿の日記『小右記』(六p.20)には記載があるが、『御堂関白記』や『権記』には欠けている。女性の書いたものでは、『更級日記』(p.300)や『栄花物語』(下 巻16「もとのしづく」p.37-38)に見られる。

以上の三つの内容に関して、次にそれぞれ比較検討する。

二 敦成(あつひら)親王誕生の場合

敦成親王誕生の前後に関して、『小右記』・『御堂関白記』・『権記』と『紫 式部日記』のそれぞれの該当箇所を先ず記す。その際、公卿の日記については併せて読み下し文をも載せている。読み下し文で()は補読を示し、和語は平仮名で記している。()の中によみを記している場合は、片仮名で漢語(字音語)を、平仮名で和語を表している。旧漢字は可能な限り常用漢字に直している。[]は正しいと思われる漢字又は不読字を記し、下線は私が付けたものである。

1. 『小右記』に見られる具体例

- (1) 鶏鳴人々告送中宮(藤原彰子)御産気色之由 卯刻許参入(中略)余已時許退出依御産気色微微也 (寛弘五.9.10 二p.146)
鶏鳴(ケイメイ)(に)人々(は)中宮(藤原彰子)(の)御産(ゴサン)(の)気色(ケシキ)之(の)由(よし)(を)告(つ)(げ)送(おく)(る)。卯(う)(の)刻(とき)(に)参入(サムニフ)(す)。(中略)余(よ)已(み)(の)時(とき)許(ばかり)(に)退出(タイシュツ)(す)。御産(ゴサン)(の)気色(ケシキ)(が)微微(ビビ)(たるに)依(よつ)(て)也(なり)。
- (2) 左武衛被示送云 丑刻許自宮退出 無御産気 但邪氣出来 (寛弘五. 9.11 二p.146)
左(の)武衛(ブエイ)示(し)送(ら)被(れ)(て)云(はく)、丑(うし)(の)刻(とき)許(ばかり)(に)宮自(より)退出(す)。御産(の)気(ケ)(は)無(なし)。但(ただし)、邪氣(ジャキ)(が)出来(シュツライ)(す)。

- (3) 湯殿間五位十人・六位十人執弓立庭中 皆着白重其前読書人立之 朝読書伊勢守致時朝臣 夕挙周朝臣 (寛弘五. 9.12 二p.146)
- 湯殿 (ゆどの) (の) [儀式の] 間 (あひだ) 五位十人・六位十人 (は) 弓 (を) 執 ((りて) 庭中 (テイチュウ) (に) 立 (つ)。皆白重 (しろがさね) (を) 着 (て) 其 (の) 前 (に) 読書 (の) 人 (を) 立 (てる)。(以下省略)

以上の3例から『小右記』では、生まれ出ようとする兆候の有無や生まれて後の御湯殿の儀式(生まれた皇子に産湯を使わせる儀式)の様子は分かるが、出産そのものの記述は無い。が、生まれたことは事実である。

なお、皇子誕生等に関する記事は、宮内庁書陵部所蔵の『御産部類記所引不知記』にはあるという^(注15)が未見である。

2. 『御堂関白記』に見られる具体例

- (1) 子時許從宮(彰子)御方女方来云 有惱御氣者 参入 有御気色 (中略) 他人々多参 終日惱暗給 (寛弘五. 9. 10上p.267)
- 子時(ねのとき) 許(ばかり) (に) 宮(彰子) (の) 御方(おほむかた) 從(よ) (り) 女方(ニヨウバウ) 来(たりて) 云(はく)、「惱(み) 御(お) (はす) 氣(け) 有(り)」てへり。参入(サムニフ) (す)。御気色(みけしき) 有(り)。(中略) 他(ほか) (の) 人々多(く) 参(る)。終日(シウジツ) 惱(み) 暗(くら) (し) 給(ふ)。
- (2) 午時平安男子産給 候僧・陰陽師等賜禄 各有差 同時乳付 切齊[臍]結[緒]造御湯殿具初 酉時右少弁広業読書 教[孝]経 朝夕同 (中略) 御湯鳴弦五位十人 六位十人 (寛弘五. 9.11上p.268)
- 午時(むまのとき) (に) 平安(ヘイアン) (に) 男子(をのこ) (を) 産(み) 給(ふ)。候(ふ) 僧・陰陽師等(に) 禄(を) 賜(ふ)。各(おのおの) 差有(り)。同(じ) 時(に) 乳付(ちづけ) (し) [臍緒] (へそのを) (を) 切(る)。御湯殿(の) 具(を) 造(り) 初(む)。酉(の) 時(に) 右少弁広業(が) 書(を) 読(む)。[孝] 経 朝夕同(じ)。(中略) 御湯(おゆ) [殿の儀式] (に) 弦(つる) (を) 鳴(らす) (のは) 五位十人、六位十人
- (3) 御湯殿読書朝(中原)致時 明経 夕(大江)挙周 (寛弘五. 9. 12上p.268)
- 御湯殿(の) 読書(トクシヨ) 朝(は) (中原 なかはら) (の) 致時(むねとき)、明経、夕(ゆふべ) (は) (大江 おほえ) (の) 挙周(たかちか)
- (4) 庁官奉仕御産養 (寛弘五. 9.13上p.268)
- 庁(チャウ) (の) 官(クワン) (は) 御産養(おほむうぶやしなひ) (に) 奉仕(ホウジ) (す)。

以上の4例から『御堂関白記』では、中宮彰子のお産の前日の(肉体的に)苦しんだ様子、お産の当日は男子を安産したこと、お湯殿の儀式の様子、生まれて三日目に「産養い」の祝宴を設けたことがわかる。

3.『権記』に見られる具体例

- (1) 夜半許中宮(彰子)御産気色云云 即参 有気色 丑刻立白木御帳鋪敷 (寛弘五. 9.9=p.102下)
夜半(ヤハン)許(ばかり)(に)中宮(彰子)御産(の)気色云云(ウンウン)。即(ち)参(る)。気色(ケシキ)有(り)。丑刻(うしのと)き(に)白木(を)立(てて)御帳(みチヤウ)を鋪敷(し)く。
- (2) 午刻許又参 未云云(中略)亦参左府 未云云 (寛弘五. 9.10=p.102下)
午刻(むまのとき)許(ばかり)(に)又参(る)。未(だ)云云。亦(また)左府(に)参(る)。未(だ)云云(ウンウン)
- (3) 巳刻参左府 午刻中宮(彰子)誕男皇子 仏法之靈驗也 御乳付橘三位 読書伊勢守致時朝臣 右少弁举周朝臣等也云云 (寛弘五. 9.11=p.102下)
巳刻(みのとき)(に)左府(に)参(る)。午刻(むまのとき)(に)中宮(彰子)男皇子(をとこみこ)(を)誕(う)(む)。仏法之(の)靈驗(レイケン)也(なり)。御(おほむ)乳付(ちつけ)(は)橘(の)三位、読書(は)伊勢(の)守(かみ)致時(むねとき)朝臣、右少弁举周(たかちか)朝臣等(ら)也(なり)云云(ウンウン)
- (4) 朝 致時朝臣〔読〕礼記第十六中庸篇 (寛弘五. 9.12=p.103上)
朝、致時(むねとき)朝臣(は)『礼記』第十六中庸篇(を)〔読〕(む)。
- (5) 亦参宮 夕方御湯殿 致時朝臣読書 弦打二十人 五位十人 六位十人(以下省略) (寛弘五.9.13=p.103上)
亦宮(に)参(る)。夕方(ゆふがた)(は)御湯殿、致時朝臣(むねときあそん)書(を)読(む)。弦打(つるうち)(は)二十人(以下省略)

以上の5例から『権記』では、出産の近いこと、男子の生まれたこと、乳付けや読書を誰がしたかということ、御湯殿の儀式のことなどがわかる。

4.『紫 式部日記』に見られる具体例

十日の、まだほのほのとするに御(おほん)しつらひかはる。白き御帳(みチヤウ)にうつらせたまふ。(中略)十一日の暁も、北の御障子、二間(ふたま)はなちて、廂(ひさし)にうつらせたまふ。(中略)御いただきの御髪(みぐし)おろしたてまつり、御いむこと受けさせたまつりたまふほど、くれまどひたるこちに、こはいかなることと、あさましうかなしきに、たひらかにせさせたまひて、のちのことまだしきほど、さばかり広き身屋(もや)、南の廂、高欄(カウラン)のほどまで立ちこみたる僧も俗も、いま一よりとよみて、額(ぬか)をつく。(中略)今とせさせたまふほど、御物(おほんもの)のけのねたみののしる声などのむくつけさよ。(中略)午(むま)の刻(とき)に、空晴れて、朝日さしいでたるこちす。たひらかにおはしますうれしさの、たぐひもなきに、男(をとこ)にさへおはしましけるよろこび、いかがはなのめならむ。(中略)内裏(うち)より御佩刀(みはかし)もてまゐれる頭(トウ)の中将頼定(よりさだ)、けふ伊勢の奉幣使(みてぐらづかひ)、かへるほど、のぼるまじければ、立ちな

がらぞ、たひらかにおはします御有様奏せさせたまふ。祿などもたまひける、そのことは見ず。御臍の緒（おほんほぞのを）は殿のうへ、御乳付（おほんちつけ）は橘の三位。御乳母（おほんめのと）、もとよりさぶらひ、むつまじう心よいかたとて、大左衛門（おほさゑもん）のおのとつかうまつる。（中略）御湯殿（おほんゆどの）は酉（とり）の刻（とき）とか。（中略）文（ふみ）読む博士（はかせ）、藏人の弁広業（ひろなり）、高欄（かうらん）のもとに立ちて、史記の一卷（いつくわん）を読む。弦（つる）うち二十人、五位十人、六位十人、二なみに立ちわたれり。夜さりの御湯殿（おほんゆどの）とても、さまばかりしきりてまゐる。儀式同じ。御文（ふみ）の博士ばかりや変りけむ。伊勢の守致時（むねとき）の博士とか。例の孝経なるべし。また、挙周（たかちか）は、史記文帝の巻をぞ読むなりし。七日のほど、かはるがはる。（中略）三日にならせたまふ夜は、宮づかさ、大夫（だいふ）よりはじめて、御産養（おほんうぶやしなひ）つかうまつる。右衛門の督（うゑもんのかみ）は御前（おまへ）のこと、沈（ちん）の懸盤（かけばん）、白銀の御皿など、くはしくは見ず。（中略）十月十余日まで、御帳（みちやう）いでさせたまはず。（以下省略）（P.167-187）

上記の『紫式部日記』からは、出産を迎える準備のこと、男子を安産したこと、お祝いのこと、湯殿や産養いの儀式のこと、中宮彰子が出産後一箇月ぐらい養生していることなどが詳しくわかる。

5. 公卿の日記と女性の日記との比較

先述の公卿の日記三つ（『小右記』・『御堂関白記』・『権記』）と『紫式部日記』とを、語彙・（文体）の両面で比較する。

先ず語彙の面では、一日の内の時間帯を表す名詞に限って両者を比較する。『小右記』では卯刻（うのとき）・巳時（みのとき）・丑刻（うしのとき）があり、三つとも副助詞許（ばかり）が後ろに付いている。漢語としては鶏鳴（ケイメイ）〔鶏鳴 アカツキ・ケイメイ 晨夜分 『色葉字類抄』中ケ暈字 黒川本98オ7〕がある。『御堂関白記』には子時許（ねのときばかり）・午時（むまのとき）・朝（あさ）・夕（ゆふべ）があり、漢語としては終日（シウジツ）〔終日 ヒメモス・シウシツ 『色葉字類抄』下シ暈字 前田本78ウ7〕がある。『権記』には丑刻（うしのとき）・巳刻（みのとき）・午刻（むまのとき）・朝（あさ）・夕方（ゆふがた）があり、漢語としては夜半（ヤハン）〔夜半（読みはない） 天部・晨夜部 『色葉字類抄』中ヤ暈字 黒川本87ウ1〕がある。

一方、『紫式部日記』には「まだほのほのとする（に）」（名詞相当語）、暁（あかつき）・午の刻（むまのとき）・夜（よ）がある。

両者に用いられている語を比較すると、十二支で表される時間帯はどちらにも見られる。公卿の日記にしか見られないのは、鶏鳴（ケイメイ）・終日（シウジツ）・夜半（ヤハン）の漢語三つである。これらの語は宮島達夫編の『古典対照語い表』^{（注16）}に無いので、『蜻蛉日記』・『紫式部日記』・『枕の草子』・『源氏物語』などには用いられていない語である。ちなみに、上記三つの語に対応する和語は、暁（あかつき）〔『紫式部日記』7例など〕、ひねもす〔『蜻蛉日記』1例・『更級日記』3例など〕、よは〔『紫

式部日記』1例・『源氏物語』4例など]である。即ち上記三つの漢語は、和文には見られない点で位相語を形成している。

次には、同じ内容をどんな語彙を用いて表現しているかを見ることにする。内容の共通しているものを二つ取り上げる。

敦成親王が生まれたことは既に見たように、『御堂関白記』では「午時平安男子産給」（むまのときに ヘイアンに をのこを うみたまふ。）とあり、『権記』では「午刻中宮誕男皇子」（むまのときに チウグウは をとこみこを うむ。）とある。『色葉字類抄』によれば、平安は〔平安 大平部 ヘイアン 上へ暈字前田本 52ウ6〕、男子は〔男子 ヲノコ 上ヲ人倫 前田本81オ4〕、男は〔男 オトコ 中オ人倫 黒川本64ウ1〕、産・誕は〔生 ウム又ウマル 産山 ウマル 已上生ウマル也 誕興育乳 已上ウム中ウ人事 黒川本49オ4－5〕とある。二つの文を構成している語は、和語として午時・午刻（いずれも、うまのとき）、男子（をのこ）・男皇子（をとこみこ）、産・誕（いずれも、うむ）、給（補助動詞たまふ）があり、漢語として平安（ヘイアン）・中宮（チウグウ）がある。その外に、補読としての助詞に・を・はなどがある。

上記と同じ内容が『紫 式部日記』では、「たひらかにせさせたまひて」、「午（むま）の刻（とき）に、空晴れて、朝日さしいでたるここちす。たひらかにおはしますうれしさの、たぐひもなきに、男（をとこ）にさへおはしましけるよろこび、いかがはなのめならむ。」とある。①平安（ヘイアンに）－たひらかに、②産給（うみたまふ）、誕（うむ）－せさせたまふ、③男子（をのこ）・男皇子（をとこみこ）－男（をとこ）の対応が見られる。①は漢語対和語、②は具体的な和語の動詞対「す」、③はいずれも和語である。

次に内容の共通しているものとして、『御堂関白記』の「庁官奉仕御産養」―「チヤウ（の）クワン（は） おほむうぶやしなひ（に） ホウジ（す）。」と『紫 式部日記』の「三日にならせたまふ夜は、宮づかさ、大夫（だいふ）よりはじめて、御産養（おほんうぶやしなひ）つかうまつる。」とを取り上げる。①御産養は和語で、両者に共通している。②奉仕（ホウジす）は『色葉字類抄』に「奉仕 ホウジ 上ホ暈字 前田本48オ4」とあり、漢語サ変動詞と認定した。和語「つかうまつる」（謙讓語）と対応している。

以上から、語彙の面では公卿の日記に於ける漢語（又は漢語サ変動詞）は女性の日記などに於ける和語と対応して用いられているもの（位相語）がある。

最後に文体に関わる面では周知の事実として、公卿の日記にはいわゆる「ク語法」が見られる。『御堂関白記』の(1)に見られるような「来云（きたりていはく）……者（てへり）」と呼応している場合の云（いはく）である。なお、『色葉字類抄』には、「謂イハク又イフ言曰猶称云導 已上同イフ 上イ辞字 前田本10ウ4〕、〔者テヘリ 下テ辞字 前田本21ウ3〕とある。

三 帥宮為尊（ためたか）親王の死の場合

帥の宮為尊（ためたか）親王の死の前後に関しては、『権記』にのみ記事が見られる。又、女性の日記としての『和泉式部日記』には死の直接の記述はないが、死を回想して

いる場面が冒頭にある。

1. 『権記』に見られる具体例

- (1) 彈正宮御悩殊重 可出家被申冷泉院云云 (長保四、6.5—p.261下)

彈正宮 (ダンジャウのみや) (の) 御悩 (おほむなやみ) (は) 殊 (こと) (に) 重 (おもし)。出家 (シュッケ) (す) 可 (べし) (と) 冷泉院レイゼイケン) (に) 申 (まうさ) 被 (る) 云云 (ウンウン)。

- (2) 晩景參彈正宮 昨夕以前大僧正為沙彌戒師 剃御鬚云云 今夜剃御髮 帰家 (長保四、6.6—p.262上)

晩景 (バンゲイ) (に) 彈正宮 (ダンジャウのみや) (に) 參 (まゐ) (る)。昨夕 (サクセキ) (に) 前 (さき) (の) 大僧正 (ダイソウジャウ) (を) 以 (もつ) (て) 沙彌 (シャミ) (の) 戒師 (カイシ) (と) 為 (な) (して) 御鬚 (おほむひげ) (を) 剃 (そ) (る) 云云 (ウンウン) 今夜 (コンヤ) 御髮 (おほむかみ) (を) 剃 (そ) (る)。家 (に) 帰 (る)。

- (3) 丑刻許惟弘来云 彈正宮薨給云云者 (長保四、6.13—p.262上)

丑刻許 (うしのとしばかり) (に) 惟弘 (これひろ) 来 (きたり) (て) 云 (いは) (く) 彈正宮 (ダンジャウのみや) (は) 薨 (コウ) (じ) 給 (たま) (ふ) 云云 (ウンウン) 者 (てへり)。

- (4) 權天文博士奉平宿祢来 示云 去九日月犯心後星變 是庶子可慎 其後不幾前彈正親王薨去給 (中略) 示宮御事 年廿六 去年冬十月受病之後数月懊惱 遂以逝去給 親王冷泉院太上皇第三子 母故前太政大臣第一娘 女御超子也 元服年叙三品 後任彈正尹 天曆朝拜為威偽 叙二品兼太宰帥 遷上野太守 臨病甚 剃髮入道云云 (長保四、6.15—p.262下)

(4)ついては、下線部分のみの読み下し文を示すことにする。其後 (そののち) 不幾 (いくばくならず) (して) 前 (さき) (の) 彈正 (ダンジャウ) (の) 親王 (シンワウ) (は) 薨去 (コウキョ) (し) 給 (たま) (ふ)。 / 遂 (つひ) (に) 以 (もつ) (て) 逝去 (セイキョ) (し) 給 (たま) (ふ)。

以上の4例から『権記』では、重病であったこと、出家したこと、六月十三日に亡くなったこと、去年の十月に病を受けて数箇月患ひ26歳で亡くなったことなどがわかる。死を表す語は、彈正宮 (為尊) が二品の親王であることから3種類の漢語サ変動詞—薨 (コウ) (ず)、薨去 (コウキョ) (す)、逝去 (セイキョ) (す) —が用いられている。これらの3語は、『古典対照語い表』に見られないので位相語である。

2. 『和泉式部日記』に見られる具体例

- (1) 夢よりもはかなき世の中を、嘆きわびつつ明かし暮らすほどに、四月十余日にもなりぬれば、木の下くらがりもてゆく。 (p.85)

「夢よりもはかなき世の中」で、夢ははかないものの例に引かれるが、その夢よりももっとはかなかった今は亡き為尊親王との恋を表している。直接に死を示す語は用いら

れていないので、公卿の日記との比較はできない。

四 藤原行成の娘の死の場合

藤原行成の娘の死に関しては先述したように、公卿の日記では『小右記』にのみ記事が見られ、女性の日記では『更級日記』に記述が見られる。又、『栄花物語』には詳しい記述がある。

1. 『小右記』に見られる具体例

権大納言（行成）如「女」今暁亡 年来病者之中 為長宗「家」室（治安一．3．19
p.20))

権（ゴン）（の）大納言（ダイナゴン）（行成—ゆきなり又はコウゼイ）（の）如
「女」（ニヨ）（は）今暁（コンゲウ）亡（パウ）（ず）。年来（ネンライ）病者（ビ
ヤウシャ）之（の）中（うち）（にあり。） 長宗「家」（ながいえ）（の）室（シ
ツ）為（たり）。

「亡」は「うす」「パウズ」のいずれも『色葉字類抄』に載っていないが、漢語サ変動
詞「パウズ」は平安末期成立の『今昔物語集』には例があり、又、娘の意味で漢語如
「女」（ニヨ）を用いているので漢語サ変動詞と認定した。

2. 『更級日記』に見られる具体例

また聞けば、侍従の大納言（注 藤原行成）の御むすめなくなりたまひぬなり。殿の
中將のおぼし嘆くなるさま、わがものの悲しきをりなれば、いみじくあはれなりと聞
く。のぼりつきたりし時、「これ手本にせよ」とて、この姫君の御手をとらせたりし
を、「さよふけてねざめざりせば」など書いて、「とりべ山たにに煙小字のもえ立たば
はかなく見えしわれとしらなむ」と、いひ知らずをかしげに、めでたく書きたまへる
を見て、いとど涙をそへまさる。（p.300～p.301）

このように死を意味する動詞は和語「なくなる」を用い、尊敬の補助動詞「たまふ」
で待遇している。

3. 『栄花物語』に見られる具体例

侍従の大納言（注 行成）の（御）姫君、ついたち頃よりいみじうわづらひ給て、限
かざりと見え給ふ。大納言も北の方も、しづ心なくおぼし惑ふ。三位の中將（注 長家）
も若き御心地に、いとあはれにおぼし惑うふ。いみじう頼もしげなくおはすれば、限
にこそはとおぼし惑ひたり。よろづの物を仏神にとのみとり集め、経にし果てさせ給
ふ。大納言も、ははきたのかたも、物もおぼし給はず。（中略）中將の君泣く泣く
近う寄り給て、御手をとらへて、「何事かおぼしめす、の給べき事やある」と、聞へ給
へど、物はいはましとおぼしながら、物はえの給はで、ただ御涙のみこぼるめれば、
男君御直衣の袖を御顔に押し当てて、いみじう泣き給ふ。この御有様のいみじきに、
北の方も覚え給はで、隠れたる方にて水浴み給ひて、物も覚え給はねど、ただ十方

の仏神を拝み給つつ泣かせ給ふ。その程姫君は、「母はいづらいづら」と求め奉らせ給て、ただ「観音観音」とのみ申し給ふ程に、この姫君の御けしきのただ変りに変わりゆけば、「(や、こは) いかにするわざぞや」とまどひ給に、ゆゆしう悲し。人々どよみて泣きののしる程、あさましうゆゆしう悲し。御乳母(めのと)、君の御足をつと抱(いだ)きて、諸声に泣き惑ふ。(中略) かかれど七日ありて生き出(い)でたる例(ためし)を、人々語り聞ゆるままに、山々寺寺に御祈(いのり)しきりたり。(中略) かくて日頃になり給ぬれば、色(いろ)も変り給ぬるぞ、いとどあはれに悲しかりける。さて七日八日ばかりありて北山なる所に、霊屋(たまや)といふ物造りて、ようさり率(ゐ)て出で奉らんとて、つとめてよりその御急ぎをそそのかせ給にも、涙のみ尽きせぬものにて暮れぬれば、今はとて率(ゐ)て出で奉る程、誰(たれ)かは安からん。(以下省略) (下 「もとのしづく」 p.37～p.39)

上記下線部分に見られるように、死を意味するのに和語の名詞「けしき」・「色(いろ)」、和語の動詞「かはりゆく」「かはる」を用いている。即ち、生きているときとは違う状態になることで死を表している。

又、物語という性格上、姫君を取り巻く人々の心情も詳しく書いてある。

以上の3例を比較した結果、死んだという事実をただ記録した『小右記』では漢語サ変動詞亡(パウズ)を、『更級日記』では和語の動詞「なくなる」を、『栄花物語』では和語の名詞「けしき」・「いろ」や和語の動詞「かはりゆく」「かはる」を用いていることがわかった。亡(パウズ)は『古典対照語い表』に無く、位相語である。

五 まとめ

先述した三つの場合(敦成親王誕生の場合、帥宮為尊親王の死の場合、藤原行成の娘の死の場合)に基づいて、公卿の日記(前者)と女性の日記や物語(後者)との両者における語彙・(文体)の領域での特徴をまとめてみる。

1. 一日の内の時間帯を表す名詞に限って見た場合、卯刻(うのと)き)や巳時(みのと)き)などのように十二支を用いるのは両者に共通している。又、朝(あさ) [『古典対照語い表』によれば『源氏物語』2例]・夕(ゆふべ) [同じく『更級日記』1例]・夕方(ゆふがた) [同じく『源氏物語』1例]などの和語の名詞も両者に共通している。又、前者にしか見られないのは、鶏鳴(ケイメイ)・終日(シウジツ)・夜半(ヤハン)などの漢語の名詞である。

2. 和語の動詞「うむ」(産・誕)は両者に共通している [同じく『蜻蛉日記』4例]が、『紫式部日記』では和語の動詞「す」を用いている。

3. 情態を表す語として、前者は混種語平安(ヘイアンに)を、後者は和語「たひらかに」を用いている。

4. 和語御産養(おほむうぶやしなひ)は両者に共通しているが、前者は漢語サ変動詞奉仕(ホウジす)を、後者は和語の謙譲語「つかうまつる」を用いている点が異なっ

いる。

5. 帥宮為尊親王（二品）の死には、三つの漢語サ変動詞薨（コウズ）、薨去（コウキョス）、逝去（セイキョス）が用いられている。後の二つは同じ6月15日の記事にあり、同一語を用いることを避けたものである。

なお、これら三つの動詞は『紫式部日記』や『源氏物語』などの和文には見当たらない（『古典対照語表』に依る）。

6. 前者の漢語サ変動詞亡（バウズ）に対して、後者は和語の動詞「なくなる」や生とは異なる様子を表す和語の動詞「かはりゆく」「かはる」を用いている。

7. 文体に関わるものとしては、いわゆるク語法と其の結び「云（いは）（く）……者（てへり）」が見られる。これは後者には見られないものである。

総まとめとしては、前者公卿の日記で漢語の名詞・混種語（漢語＋助動詞なり）・漢語サ変動詞を用いているところを、後者女性の日記や物語では和語の名詞・和語の形容動詞・和語の動詞を用いている場合のあることである。即ち、周知のように変体漢文と和文とで位相語の見られることである。勿論、両者に共通に用いられる和語のあることは言うまでもない。今回の作業は生又は死に関する場面（両者に共通する内容）に限って、語彙・（文体）の面での比較を試みたものである。

今後の課題は、変体漢文と和文の語彙を体系として比較し、変体漢文にのみ用いられる語（変体漢文特有語）、両者に共通して用いられる語、和文にのみ用いられる語（和文特有語）を特定することによって位相語の全体像を明らかにすることである。

注1 『宇津保物語』三 国譲 上に「男手も女手も習ひ給ふめれ」とある。

2 東京大学史料編纂所編 大日本古記録 所収の『小右記』（岩波書店 1987年）は10冊ある。

3 東京大学史料編纂所編 大日本古記録 所収の『御堂閔白記』（岩波書店 1977年）は3冊ある。

4 増補史料大成刊行会編 増補史料大成 所収の『権記』（臨川書店 1982年）は2冊ある。

5 松村誠一ほか校注・訳 日本古典文学全集9所収の『蜻蛉日記』（小学館 1993年）などがある。

6 藤岡忠美ほか校注・訳 日本古典文学全集18所収の『和泉式部日記』（小学館 1988年）に依る。

7 藤岡忠美ほか校注・訳 日本古典文学全集18所収の『紫式部日記』（小学館 1988年）に依る。

8 注7と同じく日本古典文学全集18所収の『更級日記』に依る。

9 阿部秋生ほか校注・訳 日本古典文学全集12-17所収のもの（小学館 1992年）などがある。

10 松村博司・山中 裕校注 日本古典文学大系76所収の『榮花物語 下』（岩波書店 1965年）に依る。

- 11 『毛詩』や『史記』などの漢籍と『金光明最勝王經』や『成唯識論』などの仏典とがある。
- 12 変体漢文は語順や助詞・助動詞などの点で日本化された漢文体で、公卿の日記や記録類に頻用されている。
- 13 承徳3年（1099）書写の奥書を持つ『真福寺本将門記』や院政末期の訓点を付けた『高山寺本古往来』などが知られている。
- 14 中田祝夫・峯岸 明編『色葉字類抄 研究並びに索引 本文・索引編』（風間書房 1964年）に依る。
- 15 注2で取り上げた『小右記』二の例言に記されている。
- 16 宮島達夫編『古典対照語い表』（笠間索引叢刊 4 1992年）に依る。
(しみず のりこ／本学助教授)